A-Lab
あまらぶ アートラボ

尼崎市

お問合せ先

尼崎市　シティプロモーション推進部　都市魅力創造発信課
TEL：06-6489-6385（イベント時　06-7163-7108）
FAX：06-6489-6793
E-mail：amalove.a.lab@gmail.com

A-Lab

archive
vol.3

A-Lab archive

A-Lab Exhibition　Vol.2

魅せる工場展

小林哲朗
NO ARCHITECTS

あまらぶアートラボ A-Lab Exhibition Vol.2

「魅せる工場展」

■目次

「魅せる工場展」 展示の様子 03

フォトコンテスト　受賞作品 09

ワークショップ1 「じぶんの工場を作ろう！」 11

ワークショップ2 「街角おもしろ写真探検隊」 12

アーティスト　トーク 「魅せる工場」 13

資料 27

A-Lab
あまらぶ アートラボ

小林　哲朗 Tetsurou Kobayashi

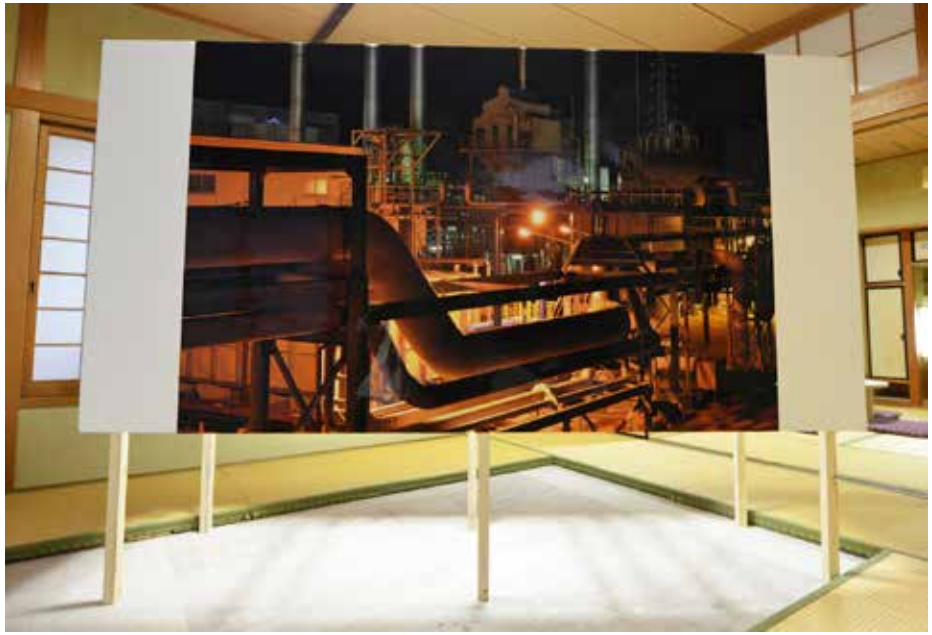
1978年生まれ。尼崎市在住。趣味で始めた写真活動が広がり、2012年プロカメラマンへ転身。前職は保育士。工場、廃墟、巨大建造物等を作品として撮影している。主な出版物は写真集「廃墟ディスカバリー」「工場夜景ディスカバリー」シリーズ。その他ポートレートも手掛けるなど、ジャンルを問わず撮影をしている。カメラ雑誌への執筆、撮影イベントの講師や講演会なども。よみうり神戸文化センター「小林哲朗のデジカメ写真塾」講師。

NO ARCHITECTS

西山広志（1983年大阪生まれ）と奥平桂子（1983年神戸生まれ）による共同主宰。2009年神戸芸術工科大学大学院修士課程を共に修了し、nishiyamahiroshiokudairakeikoとして活動を開始。2011年大阪市此花区への事務所移転に伴いNO ARCHITECTS設立。現在、建築をベースに、設計やデザイン、インスタレーション、ワークショップ、会場構成、まちづくりなど活動は多岐にわたる。

小林哲朗
魅せる工場展
NO ARCHITECTS

富士市！



「工場夜景・美の祭典」フォトコンテスト2016 受賞作品展

最優秀作品賞

優秀作品賞

技能賞

優秀作品賞

A-Lab Workshop

「じぶんの工場を作ろう!」

小林哲朗さんのアドバイスを受けながら、チューブ型のブロックで工場作りを。
小林さんが最後に作品と参加者を撮影しました。

講　　師　小林哲朗
協　　力　株式会社ベンカン
日　　時　平成28年1月30日(土)／10時30分から
場　　所　あまらぶアートラボ(A-Lab room2)
参加者数　18名

A-Lab Workshop

「街角おもしろ写真探検隊」

小林哲朗さんとあまらぶアートラボ周辺を歩きながら、
面白い風景を探し、撮影を行いました。

講　　師　小林哲朗
日　　時　平成28年2月14日(日)／10時30分から
場　　所　あまらぶアートラボ周辺
参加者数　14名

A-Lab Artist Talk

「魅せる工場」

出　演　　小林　哲朗 、西山　広志(NO ARCHITECTS)
司　会　　都市魅力創造発信課長　松長
日　時　　平成28年2月14日(日)／午後2時～午後4時
場　所　　あまらぶアートラボ(A-Lab room1)

西山　広志さん（以下　西山）　はじめまして。西山と申します。NO ARCHITECTS は西山と奥平のＮとＯで、2人の建築家ユニットということで、大阪の此花区で活動しています。

展覧会で会場の構成をしてほしいという依頼をよく受けますが、今回のように写真家の小林さんと NO ARCHITECTS で一緒に展覧会を作るというのは初めてです。会場の構成自体が表現となるようにと依頼を受けました。

初めてアートラボに伺った時は、可動式の壁になる木で作られた四角い白い箱を、スタッフの皆さんが作られている現場だったんですね。この箱が24個もあるのがおもしろいなと思いました。これを最大限活用して、既存の箱を組み合わせて会場を作っています。縦に3つつなげたり、横に寝かして足をつけたりしています。会場に展示してあるのは全てこの箱で、シンプルに最小限のコストで、最小限の手の入れ方で最大限利用しました。

まずは箱をどう構成するか考えました。いかに効率良く、バランス良く並べるか、模型などで検討しました。会場の構成をするときはいつも図面を描いた後に、模型を作って会場構成を組み立てます。ケント紙や建築模型で使われるような材料などを使っています。

写真は色々な角度から被写体を撮られていると思いますが、斜めの角度から撮られている良い写真がたくさんあって、正面から観てもより奥行きを感じるようにしました。箱の面から写真がはみ出るように、角にも写真を折り込むことで、ボリュームを大きなカタマリとして見せています。

小林さんから大量の写真を送っていただいて、僕が展示構成を踏まえて拡大する大きさを考えました。尼崎での展示なので、尼崎の写真がキーポイントになっています。1カ所に固めずに、会場の中でキーになるところに尼崎の写真を使っています。

ポイントとしては、廊下のＬ字の壁面は今回の展示の発端になった工場夜景サミットが開催されるということで、サミットに加盟している7都市を一望できる、歩きながら7都市を巡れるようにしました。その間には工場夜景のフォトコンテストに選ばれた写真も展示しています。すごい量の写真のプリントだが、全部尼崎市役所のスタッフの方が頑張ってプリントアウトしてくれています。それをカットして、手でつなぎ合わせています。プロがやっているのではなく、こういう材料があります、こういうスタッフがいます、こういう機材が使えますというような、ここにある状況を最大限に生かす形で展覧会を作るという構成になっています。

小林　哲朗さん（以下　小林）　写真家の小林です、よろしくお願いします。会場にある写真は私が撮ったものです。今回、お話をいただいて、西山さんから図面が送られたときは全く想像できなかったです。これはもう西山さんにお任せしようと。実際に実物が出来ているのを見るとすごいなと思いました。そして、ここまで写真を引き伸ばせるんだ、と。3600 万画素のカメラで撮影しているのですが、それでもここまで引き伸ばせるなんて僕にとっても新たな発見でした。図面だけじゃなくて、それを具体化して実現するチカラは僕なら絶対できない。西山さんとコラボして良かった、お互いに新発見ができたと思います。

工場の「サビ」にハマる

ーここから作品を観ながらー

（尼崎）

小林　尼崎のチタニウムの工場なんですが、尼崎で一番大きくて、一番見応えのあるプラントだったんですけども、いまは電気が付いてないので、今はこの光景は見られないんですけども、昼間よりも夜の方が幻想的でした。

（倉敷）

小林　1300mm 超望遠で撮影してます。今回はこのプロジェクターからのスクリーンで見るより、展示の方がデカいですね。

（尼崎）

小林　阪神杭瀬駅から歩いて10分のレンゴーという工場ですが、駅から近くて見応えがあってなかなか全国的にも珍しく、オススメの場所です。夜は結構暗くて怖いので2人以上で行ったほうが良いです。普段、工場は遠目から撮影することが多いですが、レンゴーは柵のすぐ、手が届くところに工場が見えて広角で撮れるというのが珍しい。会場入ってすぐの階段にある写真です。

（呉）

小林　1番奥に展示してあって、中には気づかない人もいるんですけど、見つけた時の反応がいい作品です。つなぎ目がわからないし、黒い部分が多いんでどっちが右か左かわからなかったり。これは製鉄所の炎で、シャッタースピードを上げて写真を撮っています。

（尼崎）

小林　これはロビーにある写真で、尼崎の工場の夕焼けを写しています。

（四日市）

小林　四日市はかつてぜんそくなどの公害の都市として有名だったが、いまはそういう公害があった都市が工場夜景として良いところが多いので、時代の変化とともに前向きになっているのではと思います。これは四日市にあるポートビルの展望室で撮れます。ただすごく人気になっちゃって、工場が見える窓には人がいっぱい、四日市で1番の観光スポットになっています。

小林　哲朗さん

（高石市）

小林　これは西山さんの審査に落ちた写真ですね。今回展示をしていません。高石市にある大阪ガスのプラントです。雨上がりはプラントのテカリが増えて良い写真が撮れます。

（名古屋市）

小林　伊勢湾岸自動車道を走っているところで工場が見えたので、静岡に行く予定だったんですが、名古屋で降りました。行きずりで撮った写真です。30秒ほどシャッターを開けています。安いレンズでは滲んだりしてここまで出ないんですよ、良いレンズを使っています。絞りもキレイに出ています。

（富士市）

小林　富士山をどう入れるかという撮影になってくるんですが、富士山を全体にいれても面白くないので、富士山の右をちょっとカットしました。富士山をカットしてでも工場を入れたかったですね。

西山　いろんな景色の写真がある中で、工場がなくても風景として綺麗な写真があって、展示するかどうかすごく迷ったんです。でもこの写真のように風景が綺麗なところに工場が入っても綺麗でポジティブに見えたので、工場が入った写真をどんどん入れていこうと、会場の構成を考え直そうと思いました。倉敷の写真も、父親の出身が香川なのでよくこの風景を見ていました。工場をネガティブに感じる人もいると思いますが、新しい価値をつくっていこうと感じました。

小林　僕は工場だけを撮った写真もたくさんあります。工場夜景が好きなのであえて富士山をいれないときもあります。

（尼崎）

小林　日油と関西熱化学とクボタの3つの工場を撮ったものです。背景には武庫川団地が見えていて、非日常的な工場と日常的な団地が対比した写真です。

西山　これは尼崎らしいですね。

小林　ストーリー性をもたせた作品でもあります。

西山　生活と工場が近いという風景ですね。

小林　クボタは普段電気が付いてないので、付いていればラッキー。実は溶接をしているところが写っています。たまにこういう人も映り込んだ写真があります。こういうのは「あっ!」と思って意識的に撮ります。基本、工場には動きがないので、このような動きがあるときは必ず入れて撮るようにしています。

（大竹市）

小林　工場からでる水蒸気がすごいところです。水蒸気はシャッターを長く開けると、このように流れて写ってしまうんです。工場夜景の水蒸気の写真はだいたいふわっとした感じになります。もっとモクモクした感じに撮るには良いカメラとレンズが必要になります。

（北九州市）

小林　見てもらったらわかるんですが背景がちょっと曇っています。これは PM 2.5なんです。北九州では天気予報で明日の PM 2.5はどのくらいと報道されると地元の方が言ってました。解像度は落ちるが霞みがかった方が遠景感がでます。

　この煙突には階段がまとわりついています。これがミニチュアみたいで良いです。こういう細かいところは写真を大きくしたことで気づきました。マニアックですが、このように階段の影ができるのが良いんですよ。これは水蒸気が多くて後ろの工場が見えないという写真です。冬で湿気が多い雨の後の日は水蒸気が多く出ます。

（川崎市）

小林　これは川崎市です。ジャングルのようです。夜明けに撮っていて、夜明けは背景がブルーになりやすいです。写真的には一番良い時間帯です。

（奥多摩）

小林　これは奥多摩にある奥多摩工業の工場ですね。巨大工場は資材を運ぶ関係でだいたい海辺にあるんですが、山の斜面にある巨大工場はなかなか珍しいです。関西ではあんまり見ないですね、関東にはあるんですが。屋根に草が生えていたりとか廃墟感があって、僕は廃墟も好きなので一挙両得ですね。でも、ちゃんと現役でやってる工場なんですよ。

（袖ケ浦市）

小林　ここはプラント表面の金属痕や数字などが良いですね。

西山　これを目当てに訪れたんですか?

小林　これも車で走っていて、「あっ!」と思って撮影しました。

西山　被写体を探しながら回ることもあるんですね。

（糸魚川市）

小林　これも青い背景になる明け方に撮りました。巨大なセメント工場です。

西山　私は1番好きですね。他にも工場の名前が入っている写真があったんですが、あえて名前がある方は避けました。

小林　僕も工場の名前は避けることがあります。避けた方が都合が良いこともあるんですよね。なので、写真を撮るときは名前が入ってるものと入っていないものを撮っています。

（室蘭）

小林　後ろに写っているのは白鳥大橋という、東日本で1番大きな橋です。みなさん明石海峡大橋に馴染みがあると思うんですけど、明石大橋は道路の部分は太くいいんですよね。一方、白鳥大橋は薄く作られていま

す。橋の上から工場が良い感じに撮れるんですが、橋の上は駐車禁止で、停まると放送で言われるという情報をキャッチしたので止まらずに、これは橋とは逆の展望台から撮っています。橋と工場を一緒に撮るのが室蘭の定番という感じです。

西山　室蘭は展覧会が決まってから、撮影に行かれたんですよね。

小林　そうですね。7大工場夜景都市というのがあって、僕は室蘭だけ行ったことがなくて、バッと唐突に行って、唐突に撮って帰ってきたんです。また行きたいと思います。

西山　室蘭だけ写真が3枚ありますもんね。贔屓してますよね。

小林　贔屓してますね。これはサッカーボールのタンクですね。これも珍しい風景です。これは室蘭でも好きなプラントなんですが、要塞みたいです。これは水たまりに工場が写っている写真です。川とか海とかはどうしても水面が動いているので、鏡のように写すには水たまりが最適です。

（周南市）

西山　7大工場夜景の並びにあるんですけど、最初は都市を順番に巡るように北から南か南から北へ置くようにしようとしたんですけど、印象的な写真なので廊下の真正面に展示しました。

（水島工業地帯）

小林　工場と景色の融合が良いですね。工場の中に巨大な滑り台みたいなものもあるんですよ。これは夕方に撮っています。だいたい夕方に工場の電気が付いてくるので、夕方も写真を撮るには良い時間帯です。

西山　トワイライトというか、暗くなる前に少し明るい時間が良いんですね。

（有田市）

小林　これはみかん畑から撮ってます。落ちていたみかんを踏みながら撮りました。

西山　小林さんの話をお聞きしている、公道とか誰でも撮れる場所から撮影をされているんですよね。

小林　そうですね。今回展示してある写真は誰でも撮れる場所から撮っている写真です。工場の中に入って撮った写真はないですね。中に入らなくてもここまで寄って写真が撮れるということで、その撮影ポイント探しが重要になってくるんですけど。場所を人から聞いても良いんですけど、それではおもしろくないので、僕はほぼ 100%自分の足で探して、ストリートビューで 40 箇所くらいポイントを決めます。木が茂っていたなど、現地で気づくこともあるんですけど、だいたい半分くらいは良い場所に当たります。

西山　経験を積むんですね。

小林　この山に登ったら撮れるなとか、この公園から撮れるわ!　とか大体わかってくるんです。そっちの方が人から聞くより面白いです。

（尼崎）

小林　これはクボタの工場です。パイプがむき出しになっていて、ムキムキマッチョな感じの写真です。パイプにグッと寄って撮っています。

（苅田町）

小林　これは単品の工場では日本一スゴい工場ですね。デカさとパイプのうねうね感のスゴさがこの工場ひとつで成り立ってます。

（呉）

小林　これ実は今回僕が1番気に入ってるやつで、呉の日新製鋼っていう工場ですね。高炉ってなかなか撮れるポイントがないですが、ここは結構丸見えで。ハウルの動く城みたいな感じですね。なんか飛込み台みたいなんもついてて、何のためにあるんかわからないものもあります。

高炉とかサビサビ系の工場と水島みたいなキラキラ系の工場と大きく分けると2つあるんですけど、僕はサビサビ系の方が好きです。どっちも撮りますが。好みもあるとは思いますけども。

今回、西山さんに写真をお渡しして選んでもらって、こういうときは客観的に見てもらった方が良い感じになると思うんで、西山さんのセレクトも良かったです。今日はほめたたえあう感じになりましたね。写真の配置とか大きさについては西山さんが計算してもらっているので、発見がたくさんできて良かったかな。

松長　小林さんはどちらかというと、素材を提供いただいた後はどうぞご自由にというようなスタイルですよね。

西山　確かに珍しい。構成の中でこの写真は絶対使って欲しいとか、この写真はこの大きさにして欲しいとか、下手したらスケッチまで書いてこういう構成にしますかと話し合うアーティストもいるが、私はどっちでも楽しめます。楽しかったです。

完全に計画した内容の通りにできているのではなくて、自分の中でも発見的に楽しめる要素を残しておいて、こうすれば良かったなとか、実験して実証しながら楽しめたと思います。

小林　途中でああしましょう、こうしましょうみたいなのがありましたもんね。そういうのが面白いですよね。

松長　小林さんにとっては他の人に見せるプランを考えてもらったのは初めてだったんですよね。

小林　そうですね。僕が写真展をするときはパネルに貼るか、額に入れるかしか思いつかないですけど、壁に直接拡大プリントして貼ると「はっ!」って感じです。この壁紙欲しいなぁとか思います。作業は結構大変でしたね。

一緒に作り上げること

（写真切り替え）

西山　これは NO ARCHITECTS のホームページです。web デザインは多々良直治さんにつくっていただきました。全部大きさが違うんですよ。毎回違うように出ます。

西山　広志さん

小林　ここにこれがくるとは限ってないんですね。

西山　順番は一緒なんですけど、大きさが 5 種類位のサイズが段々に表示されるんです。

これはショップのデザインです。Dot & Stripes という女の子の服屋さんがあるんですけど、そのショップデザインを何軒か担当しています。。

小林　全国の?

西山　7 軒目くらいです。AMBIDEX(アンビデックス) という会社があって、いろいろなブランドを持ってるんですけど、そこの2つのブランドのお店のディレクションというか設計をさせてもらっていて。

小林　すごい。いいですね。

西山　いろいろやりたいですけど、お仕事いただいたら何でもお受けしています。（写真切り替え）これはアサヒアートスクエアという、アサヒビールがやっている文化事業のスペースがあって、もうなくなってしまうんですけど、そこの受付カウンターだけ作った。建物自体は、フィリップ・スタルクというデザイナーがデザインされた建物なんですけど、そこの受付のカウンターを作る仕事があって。大きい建物の中のここだけ作るみたいな。

小林　施工もみんな西山さん?

西山　それは長い話になりますけど。アサヒビールってアサヒの森というのが広島にあって、環境保全の一環

で森を育てるということをしていて、その森の間伐材を使ってほしいということでした。元々ビールを栓するときに、戦前は栓の裏にコルクが使われていました。使われていたコルクが、戦中が輸入できなくなって、自国で作らなあかんとなって、コルクオークという木を植林して作られた森があって、直接使われなくなって森だけ残っているんです。それがアサヒの森、それと環境保全の取り組みとして残していて、そこで取れた間伐材を使って、アサヒビールの社内の家具を作ったり、その一環でアサヒアートスクエアの中の受付カウンターもアサヒの森の材で作りました。

小林　すごいこれは聞かないとわからないですね。

西山　FSC認証というのがあって、環境保全の取り組みをして作られた木材ですよ、というのを認証するマークがありまして、その認証を持っている木工所じゃないとつけれないんです。（アサヒアートスクエア）東京の場所なんで、僕ら大阪に事務所あって、広島に森があって、最小のコストで作るには広島で作るのがいいとなって、広島の森で伐採した間伐材を９本、FSC認証のあるところで製材して、それを広島の家具屋さんで加工して、東京に持ってきてできました。1年がかりの一大プロジェクトでした。

小林　すごい。これに９本使われているんですか?

西山　これ（受付）以外にもスツールとか

小林　中にあるんですね。

（写真切り替え）

西山　これは猪熊弦一郎現代美術館。香川県の丸亀市にある美術館で、これはミモカの小屋プロジェクト。開館 23 周年記念と書いてあるんですけど、毎年やっているんですよ周年イベントで。猪熊さんの誕生日会みたいな形で、毎年やっていて市民の人に開かれていて、美術館タダで入れるんですよ。ちょっと前乗りして、子ども達とワークショップをして、このイベントを祝うような形をみんなで考えて作って、しかもみんなで運営するっていう。左のはこたつ小屋を作って中でお茶が飲めて、右はボードゲームセンター、上のは黒板なんですけど、ボードゲームが描かれていてそこでできるとか。そういうのがいろいろあって楽しめる。楽しかったです。子ども向けのワークショップとかの仕事もよくやっていて、空間をどう作るかとうことを、子どもと一緒に考えたりとか。

（写真切り替え）

　これは普通に内装の仕事とか。これは京都芸術センター、旧明倫小学校のスペース。そこの名物企画で、明倫茶会というのがあって、いろいろなアーティストとかを席主に選んで、その人がお茶会をするっていう企画があるんですけど、この時は建築系のチームが席主に選ばれていて、みんなで茶室を作るというワークショップをしました。

　ここは芸術センターなんで、舞台照明とかがたくさん設置されていて体育館みたいなところなんですけど。一灯だけスポットライトあてて、そのスポットの円の部分だけ舞台を作って、真ん中に穴があいていて、そこが躓口になっていて、そこに脚立を置いて上がるという。ワークショップ形式で参加者とともに組み立てました。

小林　梯子を外されるわけですね。

西山　宙に浮いたような。

小林　不思議な感じですね。

西山　今回小林さんの展覧会作ったみたいな、誰かとコラボレーションして展覧会を作るということを、わりとたくさんさせてもらう機会があって。これはアート大阪といって、大阪駅のホテルグランヴィアがメーン会場のアートフェアがあるんですけど、ホテルのワンフロア全部にギャラリーが入ってます。そのサテライト企画で、E-ma というファッションビルの中で。

（写真切り替え）

小林　これは写真展ですね。

西山　企画自体は、FLAGという大阪のチームが企画していて、ギャラリーとかで買った作品が、一旦家の中持ち込まれて、それがどういう風に展示されているかというのを、もう一回写真家の人が撮って。実際アート作品がどういうふうに生活に中に溶け込むかというのを展示した写真展。一旦家を作って、その家の中に写真を飾って、ちょっとアットホームな感じの空気感を作りました。これが 2011 年です。

　その翌年もサテライト企画でやったものが、僕らの事務所の近く、此花区の西九条駅から歩いて５分くらいのところなんですけど、梅香堂というギャラリーが当時あって、そこでレジデンスしていたドゥーニャさんというドイツ人の作家さんの展覧会をするという企画です。ドゥーニャさんがギャラリー周辺で撮影した写真とともに、アトリエ自体を断片的に会場に持ってくるという構成です。大阪に来ていろいろ買った物や、書いたメモとかも。ギャラリー内で日常的に設置されているものもお借りしたりもしています。梅香堂の壁面は銀色のトタンなんですが、その材質にしています。

これは林勇気さんと制作した作品です。林さんは映像作家なんですけど、NO ARCHITECTS と一緒になんかしようということで、林さんが理想の家は何ですかみたいなアンケートを作って、それに対して窓がどこにあるとか、こういう場所に建っていて、こういう材質でとか。参加者が答えたアンケートをもとに、NO ARCHITECTS が一個一個家を設計して、断面図、平面図、立面図を描いて、それを映像化していくという。それが 20 軒。

小林　実物はないっていうことなんですよね。

西山　映像の中に仮想の家がある。神戸のアートビレッジセンターで展示がありました。

（写真切り替え）

これはまた林勇気さんと、植松琢磨さんという美術作家さんのドイツでされた展覧会を、大阪で再展示するという企画の会場構成です。これは実物ではなく模型なんですけど、7分の1位に縮小して、その中にわざわざ縮小されたミニチュアの作品を展示するという構成です。

松長　作品は誰が作っているんですか?

西山　作品は作家本人が作っています。でっかいプロジェクターで投影していた映像作品は、小さいプロジェクターでやるとか。会場は大阪の浜屋敷という場所です。今回の A-lab. と同様に畳の和室の部屋がありまして、部屋の中央の畳をはがして模型を展示しています。各部屋にドイツのデュッセルドルフと、enoco の会場模型を配置してます。それぞれ、1.5 メートルくらいの大きさです。

（写真切り替え）

　これは大阪の the three konohana というギャラリーで個展を開催した時の写真です。NO ARCHITECTS は自分たちの表現をもって活動しているんじゃなくてクライアントがあって初めて仕事になるという職業なんで、誰かとぜひ一緒に作ろうということで、いろいろな作家さんと作品を作りました。これはヌケメ帽っていう帽子を作っているデザイナーとヌケメさんと詩人の辺口芳典さんと帽子を作ったりとか。これはイラストレータの山内庸資さんによるまちの地図を元に時計を作ったものです。これは音楽家の蓮沼執太さんと音の作品を作ったりもしました。

（写真切り替え）

　これはイラストレータの山内庸資さん。

（写真切り替え）

　これはまちの地図で。これは音楽家の蓮沼執太さんと映像作品を作ったりしました。

小林　音楽家の方と?

西山　そうなんです。「生活の音」という作品で、木製

の冷蔵庫の中に抽象化したキュウリ、イチゴのジャム、牛乳、缶ビールが入っていて、それがスピーカーになっています。それぞれが消費される時の音を録音した音のリズムが、重なり合ってアンサンブルとして、冷蔵庫の中から聞こえます。開けると消えちゃうんです。これは神戸会場での展示風景です。これは京都。

小林　どこでもやってますね。

西山　これは京都と大阪と神戸でやる前提で企画していて、全部組み立て式。

（写真切り替え）

　これは美術家の小出麻代との共作です。ホテルの一室が展示会場になっていて、ベッドのシーツを雪山に見立たインスタレーションです。中を覗くと構造体が見えます。小出さんは鉛筆などの日用品を使って作品を作っています。

（写真切り替え）

　これは、先ほども登場しました蓮沼さんとの展覧会の写真です。音楽家の作品をどう展示するか、材料や作り方など一緒に考えながら、神戸から東京、青森、別府と、会場を変えながら作品作りをサポートしてます。こんな感じで、いろんなジャンルの方と展覧会を作るということをしています。

（写真切り替え）

　これはグラフィックスコアといって、透明のアクリル板にスコアが書かれたものが空間に構成されていて、これらのスコアで演奏された曲が上のスピーカーから流れる。音だけ展示するって結構難しいんですけど、それを空間でどういうふうに定着させるか。それを実際にどういうふうなボリュームでどういう材料で作るかということを一緒にして巡回しました。最初は神戸で、そのあと6回位いろんな展覧会を一緒に作っていて。これは装置になっていて、ラッパみたいなところにスピーカーが置いてあって、スピーカーで音が鳴ると、その筒の細い所にマイクが仕込んであって、音がハウリングする。それが3つで構成されていて、それぞれが違うエフェクトがかけられています。人が歩いている音も拾って、音が響く装置です。これはうちの事務所の近くの鉄工所とかで曲げてもらったりとか、町工場で作ってもらった。真ん中に立ってるのは、淀川で拾ってきた流木。流木を一緒に拾いに行って、これやって言って。

さっきのやつは東京のアーツ千代田の3331という所でやったやつなんですけど、これは青森の国際芸術センター。という感じで、割といろんなジャンルの人と一緒に展覧会を作るというのを定期的にやっています。メーンというわけではないですけど。

松長　こういうの以外は普通の設計もやっているんですか?

西山　そっちがメーンです。内装が多いんですけど。此花区で活動していて、その界隈の物件、古い木造アパートをカフェにしたりとか、シェアハウスにしたりとか。ひとつひとつの仕事は小さいものが多いのですが、点を増やして面的に広がっていくような活動をしています。

松長　どっちのほうが楽しいですか?

西山　何でも楽しいです。求められることを求められるがままにやっている。

松長　（この展覧会で）NO ARCHITECTSの名前が（前に）出るのは初めてというのは意外な感じがしますね。これだけ展覧会をやっていて、NO ARCHITECTSという名前がもっと前面に出ている印象でした。

西山　NOってポジティブなNOではあるんですけど、

存在がない方がいいんです。基本的には存在がなくて、この環境ができているのが一番いいなと。そういう状況をどうやったら作れるかと。私たちが実際この場に関与しなくても、この展覧会ができていたらそれが一番良いです。そういう仕事の作り方はあるなと思って。環境の作り方、どこまで環境と捉えるかということなんで。これが私たちの普段の活動です。

ドローンが開く新たな工場

小林　僕のほうもちょっと。僕も工場写真ばっかり撮っているだけではなくて、普段はいろんな写真を撮っています。昨日は幼稚園の劇を丸一日撮り続けて、筋肉痛になっています。元保育士で保育園で働いてました。そういう学校写真もやりますし、広告、雑誌からの記事を書いてとか。なんかの表紙撮ってとか、この写真使わせてとか。そういうのが結構多いですね。工場写真も今でも仕事していろいろ依頼いただくことあるんですが、でも趣味の感覚でずっと撮ってるんですよね。逆にその感覚をなくすと商業的な写真になるとおもしろくないので。こないだ行ってきたのは、先ほど工場の外から撮るというのを言いましたが、工場から依頼をもらって、工場の中を撮るのを目指していまして、それがこないだ機会があったので行ってきました。製鉄所の採用パンフレットの写真を撮るという依頼で行ってきまして。

（写真切り替え）

　これは高炉から鉄が出てきている所なんですが、要するに鉄が溶けている状態。5メートル位離れていたんですけど、死ぬほど暑かったです。だからあんまり長時間撮れない。一般の見学会でも見れたとしても写真はダメというのが多いと思います。今回は仕事だったので。でも燃えてる所の上の方がすごいごちゃごちゃしていてカッコよかったんですけど、そこは撮ったらダメということで。

（写真切り替え）

　これは高炉の真下ですね。この人が手元のリモコンを操作して、あのカマボコみたいなのを上げたり下げたりしています。これは仕事用の写真で、めちゃくちゃ迫力があるんですよね。これは工場の中の、溶けた鉄を運ぶ列車ですね。地獄の釜のような。これ入ったらね、「I' ll be back」です。（笑）　ターミネーターの。さっきの溶けたやつはこういう感じで、火花を散らしながら別の炉に入れるんですけど、そうすることによって不純物が取れるという作業らしいです。

松長　列車は溶けないんですね。

小林　溶けないですね、たぶん耐火煉瓦か何かを使っています。ここの工場の人の注文としては、蒸気はなるべく入れないでとか、錆びているところはなくしてとか、そういうふうに見せたいらしいんですけど、絶対あとで画像処理でやらないと無理っていう。

　これは鉄を冷やしながら、薄く延ばしているマシーンで、現物みたらすごいかっこいいんです。この赤い鉄が熱いんで撮影しているところも暑い。こういう仕事が増えたらいいなという感じで。たぶん今年度の採用パンフレットに載りますんで、就活している方はぜひ。

西山　カタログを請求したら貰えるんですか?

小林　貰えると思います。どの写真が使われるのかわからないですけど。さわやかに修正されている可能性が非常に高い。

　先ほどお見せした、または今日展示している写真は、こういう機材で実際撮っています。よくどんなんで撮ってるんですかと言われるんですが、だいたい三脚立てて、こういうレンズで撮ってます。これは300ミリの望遠レンズなんですけど、短焦点レンズなんでズームができないです。ズームができない代わりに、画像がめちゃくちゃ綺麗です。価格が56万円します。これが400ミリの単焦点になると、一気に120万円になる。さすがにそこまではちょっと買えないんで。300ミリは数キロ離れたものも撮れたりします。もうちょっと撮りたいなと思ったら、こういうテレコンというやつを付けるんですけど、これを付けると焦点距離が1.4倍になります。ほんのちょっと画質が悪くなるらしいですけど、目で見る範囲ではわからない。

西山　一切ズームできない?

小林　ズームできない。自分で動くしかない。さらに望遠にしようと思ったら、こういう小さいカメラを逆に使います。これはニコン1というカメラなんですけど、これの×2.7 倍の焦点距離で撮れるんで、420×2.7 でだいたい 1300 ミリ位の感じになるんです。撮るときはこういう感じです。レンズにカメラが付いている感じ。実際にこれで撮れたのはこれ。後ろにあるんでまた見てください。ただ絞りとか全部フルマニュアルなんで、ピントとか合わせるのもちょっと難しいです。そして、ほんのちょっとでも風が吹くとブレる。ブレが映っちゃって、写真がにじんでしまうので気をつけて撮らないといけない。なのでこれはセルフタイマーで撮っています。こうやって撮ると（ボタンを押す）、手を離した瞬間にブレるんですよ。風が吹くときは傘でカメラをガードします。というのを夜一人でやるわけです。さっきの岡山の水島なんかは、デートスポットでもあるんで、カップル達がいる横でひとりで傘さしてやります。ブレの対策としてはもうひとつ、ストラップに風が当たるとブレるんでストラップを外せるやつを。これでブレが防げる。それくらいブレない写真を撮るのが夜景の場合は大事。三脚ももちろん重いやつを使うんですけど、軽いやつでは、3 千円の三脚とかでは、まずこれが（望遠レンズ）乗らない。この三脚は 2.6 メートルまで伸びるんです。こいつはまだポテンシャルを半分も出していない。これは工場の壁が高い場合乗り越えて、完全にスパイみたいな感じ。そうすることによって、あんまり人が撮れない写真が撮れる。小さい方のカメラで撮ったものでも、大きいカメラで撮ったものでも画質がそんなに変わらないところがある。やっぱりレンズの性能がすごい大事。お金かけるのならレンズのほうがいいと思います。そのことが今回の展示でめっちゃわかりました。このカメラでこんな伸ばせるのと思いました。

あとは最近ドローンで空撮をよくやります。ドローンは、今法律が変わって夜自由に飛ばせないんですよね。夜は全面的に禁止なんで。この場所で夜飛ばしますよ、という申請をださなければだめで。僕、尼崎の工場地帯では申請出してOKが出ていて自由に飛ばせるんですが、他の所で飛ばそうと思ったらまた別の申請が必要です。最大一年有効です。たぶん一年以内には、免許制の話が出てくると思うのでまた変わってくると思うんですけど。

これは工場じゃないですけど、西宮の蓬莱峡という所。これは堺の、高速道路から見たら綺麗な所。これが今回展示してある尼崎のやつですね。ドローンは付いてるレンズが 20 ミリの単焦点なんで、あんまり大きくない工場だと上がりすぎるとほんとに細かくなるだけで全然迫力がない。なのでどの高度で撮るかというのがすごく大事です。絶対私有地の上は飛ばしてはいけない。ニュースを賑わせた人達、あれはありえないですから。普通にドローンを飛ばそうと思ったら。姫路城にぶつけたり、首相官邸に落としたり。僕は人が通らない運河の上から撮るようにしています。

松長　ドローンのことを教えてもらって、8 時間後には発注したんでしょ?

小林　今回フォトコンテストで、室蘭の写真を撮っている方がドローンを持っていて、僕が室蘭に行った時たまたまお会いして、その方がドローン飛ばして、次小林さんですよ、と。でコントローラーもらって飛ばしてみたらこれはすごいと。帰りの千歳空港から帰る前にアマゾンでポチっとして、ぼくが帰ったらドローンが来ている。12 月 10 日から規制が始まる前にドローンを飛ばしまくろうと思って。それが 11 月末位。それで焦って買いました。画質はやっぱり一眼レフには劣るので、あんまり大きく伸ばすものではないです。

松長　動画がおもしろいですね。

小林　そうですね。ほとんどの人は動画用で買うと思います。動画も空中でぶれずに撮れます。空中でシャッターを 3 秒、4 秒あけれる。ブレないんです。

松長　すごいセンサーですね。

小林　そうですね。これは明るいからわかりやすいかな。これは飛んでるんです。降りてきているのかな、これは赤穂のセメント工場です。これも安全を考えて海の上を飛ばしています。

西山　本体は動いてるけど、カメラはブレてない。

小林　めっちゃ手ブレ補正がついてます。これを見て写真でも使えると思って買ったんですね。これは蓬莱峡ですね。これが西宮というのも驚きなんですが。

というのがこれなんですけど、（ドローンを出す）これが飛びます。今日はプロペラだけ回そうと思うんですけど。西山さんじゃあ、こうやって持ってもらって。怖くても離しちゃだめですよ。操作はこのリモコンでします。

松長　重さはどれくらい持ち上げるんですか? 西山さん持ち上がらない?

小林　飛んで行ったら、新しい乗り物が開発されますけど。（笑）

これは中国のDJIというメーカーなんですけど、世界トップシェアで、7 割 8 割のドローンはここで、しっかりしたメーカーです。ここに映像が映ります。（リモコンのモニター）

松長　ブレてない?

小林　ブレてないですね。

西山　（ドローンを揺らす）すごい。

小林　このプロペラの代わりに持ち手をつけて、ぶれないカメラをつけて撮影とかできます。ちょっと回してみますね。

（プロペラが回る）飛ぶときはこれくらい。

西山　持っていかれますね。想像以上のパワーです。

小林　これが飛んで行って、高さ的にはどこまでも結構いけます。電波が 2 キロまで。でも法律上は 150 メートルまでしか上げてはダメなんで。申請したらもう少しは上げれるんですけど。

松長　でも 2 キロって見えないですよね。

小林　2 キロは見えないです。一応、目の見える範囲で飛ばしましょうというのが推奨されてます。まあ、目で見えないところまで飛ばしますけど。1.2 ～ 1.3 キロ位までは飛ばしたことがあります。ホームボタンを押すと、飛ばした所に降りてくる。すごい安全です。たぶん飛行システム自体は完成されていると思うんで、あとは付属のカメラの性能が上がっていくだけ。なんかドラえもんみたいな未来の道具ですね。

そんなに値段も高くないので。僕のは4kの動画が撮れるんですけど、普通にフルハイビジョンの動画のモデルだったら 10 万位で買えます。ドローンは、買って飛ばすのはすごく簡単なんですけど、今は法律の方が面倒くさいです。申請書は 30 ページ位なんですけど、11、12 回位書き直しさせられる。めっちゃ細かいです。

松長　初日に許可を取ったんですよね。

小林　そうです。規制日初日に。規制されてるのは、まち中とか夜。物件に近寄ってはいけないとかあるんで、例えば山の方、規制区外だったら、昼間だったら買ってすぐ飛ばしに行くこともできます。免許も何もいらないので。でも僕は夜景が撮りたいので。100%許可がいる。人がいるところで夜景なんで。でも、そんなに画質はすごく良くはないので、こういうカメラと合わせて、システムの一つとしてドローンを使う感じでやってます。ドローンがメインには成り得ないです。良いものは、一眼レフが搭載できるごついものがあるんですけど、ブレ防止マシーンだけで 20 万する。ドローンの本体、一眼レフ、コントローラーでたぶん 100 万円位する。ちょっとそこまでは。空撮業者ではないので、できないなという感じがあります。

松長　撮ったデータは本体の方にあるんですか?

小林　はい、本体の方にありますし、転送もしてくれます。マイクロSDが付いています。

松長　もう少し時間があるようなので、会場の方でお2人に何かご質問などありますか?

質問者1　私は写真に関しては全く素人なんですけれども、小林さんに質問なんですが、一つは、工場夜景の写真の見え方が実際の（風景）に近いものになっているのかということと、もしそうでないとするならば、光の色とか明るさ、広がり方などが　どういう所に気をつけているのか、どのように撮っているのかを教えていただきたいです。

小林　カメラで撮る上で完全に夜景の光を再現するというのは、ほぼ不可能なんですね。工場夜景の場合、オレンジ色とか白っぽい光とかがあるんですけど、それをカメラが同時に判断してというのは、今の時代難しいです。もっと時代が進んだらそういうこともカメラが判断するようになるかもしれないが。なので、確実に色調整はします。照明の色の調整がひとつと、あとは明るさ。実際に目で見るよりも明るく表現できるというのが、カメラの良いところ。実際よりは明るく撮っています。**（写真を見せる）**実際はこんな暗い感じです。僕はあえてちょっと暗めに撮ります。なぜかというと明るめに撮ると、こういう明るいのところが真っ白になってしまいます。真っ白けになると、後から暗くすることができないんですよね。暗いのは明るくできるんですけど、明るくて真っ白になったものは、あとからデータ戻せないので。こういう感じで撮りまして、あと補正が必ず必要で、こうやって明るくしても、実際のデータがあるので。Lightroomというソフトをよく使います。色調整もいろいろやるんですけど、こういう感じでどの色が良いかなぁと。だいたい写真に写っている、白いものや、グレーのものを基準にします。あとは部分的に指定して、この界域はもっとこうかなぁと、色を変えたりします。あえて色を補正しない方が良い場合もあるので、明かりのバランスとかをみて、この色は残しておこうか、カメラが判断した色を残しとこうというかとか、この色は戻そうかというのをいじってます。あんまり派手派手にはしないんですけど、基本はなるべく忠実な方が良いかな、と。それにこだわるとちょっと迷い込んでしまうので、あんまりこだわらないようにしているという感じですね。

質問者1　では、ご自分の中で何か魅力的な軸みたいなものがあって、それに合わせて少し調整されるという。

小林　そうですね、全体的に見た感じですね。やっぱり演出のための明かりではなくて、作業用の明かりなんで、あんまり派手にしてしまうと逆に変な感じになってしまう。その辺は気をつけています。でも、光の当たり方をどう処理するかは一番難しい所です。彩度とかいじると色がきつくなったりするんですけど、色味はあんまりさわらないですね。

質問者2　さっきもフォトコンテストの写真とかを見せてもらったら、HDR合成したようなものが多くて、ネットで見ててもそういうのがだいぶ多いと思うので、ああいう表現ってどういう。

小林　僕はもちろんHDRやってる人はやってる人でいいと思うんですけど、やっぱり工場の持つ生々しさが消えちゃうんですよ。CGっぽくなりすぎるというか。僕の表現としては、ちょっと違うなと。HDRはHDR部門で作ったらいいと思うんですよ。写真とはちょっと違うなと。HDRですごく自然に明るいとこと暗いとこを合成して写真っぽく見えるようにしている人もいますし、程度だと思うんですけど、あまりガチガチにやりすぎるのは僕はやらないかな。否定はしないですけど、僕は絶対やらないです。HDRの方がすごい派手なんで。本当にやり方なんで。僕は生々しさを出したいのでやらない。HDR上手にされる方はほんとにすごい。表現のひとつとしてありというのが僕の見解です。

質問者3　先生の撮られている写真というのは、工場のどこを撮りたいとか、たとえば精製棟であるとかそれらを理解して撮られているのか。主観的に絵になるという感じで撮られるのかどっちのタイプですか?

小林　僕は見た目オンリーです。機能とか全く知らないです。

質問者3　構図とか色とか、煙とか出てたら撮られるんですか?

小林　構図と、ほんとに見た目さえよければ。

質問者3　先生の写真で題をつけるとか、テーマをどうするかというのは考えてられますか?　例えばこれを見て、我々だったらどういう名前をつけようかな、とか考えるんですが。そういうのがあった方がどこを見たらよいのかな、とか漠然としてはあんあまりおもしろくならないじゃないですか。

小林　そういう意味では僕の写真は、記録的な面が結構あるのかなと思いますね。工場の細かさとか見た目の生々しさが伝わったらよいかな。構図のバランスですよね。

質問者3　私は、例えば明かりだけきれいとすれば、何の明かりか、なぜこういう明かりが出ているのかということを調べたいタイプなんでね。煙が何を焼いてる時の何を燃やしている時の煙かなということがわかったら、もっとリアル感が出るかなと生意気に思ったんですけど。

小林　僕もそういう需要があるときは。例えばバスツアーで解説しないといけない時とか。そうなると下調べして、これこういうやつなんかと。ちょっとずつ知識は身についているんですけど。見た目が優先で知識は後からというタイプです。

質問者4　小林さんとNO ARCHITECTSさん両方に質問なんですけれども、まず工場で煙突とかパイプとかいろいろあるんですけど、あまりパーツでは見ないと思うんですけど、特にそのパーツがお気に入りとか、工場全体の中やったら、これが好きやというのがあったら教えてください。

西山　差し色で黄色が入っているとか、煙突だったりとか。全体の構図として色の入り方とか。

小林　確かに色塗っているところは見栄えがする。僕は逆で錆びているところとか。生々しい系がやっぱり好きですね。きれいなのよりありのままを見せてくれよというのが、ちょっとありますね。

西山　僕から質問してもいいですか?　廃墟とか工場とか一定のテーマで撮られていて、そういう流れで次これ撮ってみたいなというのはありますか?　ドローンとかの技術以外で、次テーマに成り得るんじゃないか、というようなものはありますか?

小林　結構ごちゃごちゃしたのが好きなんですよ。核融合炉とか加速器とかすごいんですよ。核融合炉を撮りたいんですけどなかなか行けないですよ。核融合炉は、別に放射能が出るとかではないんですけど、すごいやつなんで。マンガのAKIRAに出てきそうなすごい計器が実際にあるんで、そういうのを撮ってみたいです。

フライヤー

会場配布資料

あまらぶアートラボ A-Lab archive vol.3
Exhibition vol.2「魅せる工場展」

発行
編集　　尼崎市　都市魅力創造発信課
制作